

優秀賞

「私の未来は、なに色？」

—純粹—

兵庫県立鳴尾高等学校 二年

佐々木 陽 那

私の未来は何色だろう、と考えたとき一番最初に浮かんできたのは「白色」だった。平和、純粹、無限を表現する白色は私が目指す職業の色でもあった。

その職業に憧れたのは中学一年生のときだった。私は学校帰りに隣に住む祖父母の家に寄ろうと想ってインターホンを押してみた。しかしインターホンの向こうからの応答はなかった。買い物に行ったのか、と思って家へ帰ると母が「おばあちゃん、ヘルペスっていう病気にかかって入院してん。あとでお見舞い行こか。」と言った。お見舞いに行くと、幸い祖母は元気そうだった。

しばらく心配そうにしている私を見兼ねて一人の看護師さんが「おばあちゃん大丈夫だからね。あと一週間もすれば退院できるよ。」と言ってくれた。その時の不安から解放された気持ちと看護師さんの素敵な笑顔は今でも鮮明に私の脳内

に残っている。

そこから私は徐々に「看護師になりたい」と思うようになった。でもまだはつきりと将来の夢を決定した訳でもなかった。

中学校には「一夏一善」というボランティアがあった。それは夏休みに一回は善いことをしよう、という活動だった。そこで私は小学校のお祭りの屋台番のお手伝いをした。私の担当はスマートボールの店番だった。来てくれる子は四歳ぐらいの子から高校生までと、幅広い年代の人が来てくれて皆笑顔になって帰っていくのを見るのが凄く嬉しかった。「ボランティアって楽しい。」と思ってもう一つ小学校と中学校の草抜きボランティアもした。8月の猛暑で汗が止まらなくてすごく暑いし疲れたけど、終わった後の達成感と先生方が喜んでくれてやりがいを感じた。

私はこのことから、人のために何か行動することって凄く楽しいし素敵、と思って出来る限りのボランティアに参加した。

中学三年生になった春のある日、母が私に「陽那、将来の夢何？」と聞いた。私は「人の役に立てるもの！」と言った。その時母は「陽那は知らない人でも明るく話せるし、看護師とかどう？」と提案してくれた。私は看護師に興味を持っ

ていたし、そろそろ進路についても考えないといけなかったから七割ぐらいの気持ちで「看護について学べる高校に行く」と思った。その七割ぐらいの気持ちから十割にした出来事があった。

それは中学三年生の夏に祖父が倒れたことだった。祖父は元々歩くことが好きで、夏でも冬でも関係なくほぼ毎日一時間以上歩いていた。祖父が倒れた時は「熱中症」と言われ、二日入院しただけですぐに退院できた。

しかし退院した一カ月後、祖父は再び倒れ救急車で運ばれた。そしてお医者さんからは「胃がんです。」と言われた。私は胃がんの症状などは全く分からなくて、そんなに重病ではないと思っていた。

二カ月の間、祖父は入院してもいつもと変わらず元気で頑固で毎日のように祖母とけんかをしていた。

容体が急変したのは入院して三カ月目の十一月だった。いつも通りお見舞いに行くといつもの病室に祖父はいなかった。看護師さんに聞くと「昨日から容体が急変して個室に移動したんだよ。」と言って病室まで案内してくれた。私の目線の先には鼻チューブをして今までに見たことがないほどガリガリにやせ細った祖父がいた。

祖父はそんな姿になってからはご飯も食べず、ずっと「も

う死にたい。」と何度も繰り返していた。私はそんな祖父を見て何も言えなかった。

ネガティブになっていく祖父に対し、看護師さんは毎日笑顔で「絶対良くなるから。一緒に頑張りましょう!」と言って下さっていた。わがままな祖父の希望も毎日嫌な顔をせず聞き入れてくれた。

その姿を見て私は、絶対に看護師になると決めた。だから高校は鳴尾高校の教育、福祉看護が学べる特色選抜を受けようと思った。祖父にも「頑張って高校の入試の勉強するから、おじいちゃんも頑張ってな。」と言った。

そして入試のちょうど一カ月前の一月十五日に祖父は息を引き取った。息を引き取る三日前にお見舞いへ行ったときに、ほとんど喋ることができないのに祖父は「陽那やったらええ看護師になれる。頑張りや。」と、かすかな声で言ってくれた。それで今、私は鳴尾高校に通えている。これも今まで私に携わってきてくれた地域の人や家族、そして最後まで応援してくれた祖父のおかげである。

祖父との約束を果たすために、多くの人々を助けるために私は潔白で純粋な白色になりたい。